



ブラジルで考えたこと

上 田 篤*

1978年6月6日から6日間、わたしはブラジルのサンパウロに滞在した。日本移民70周年を記念してのシンポジウムに出席するためであった。これは、わたしにとっては、3回目の渡伯である。

過去2回のブラジル行きは南米における各国移民者の都市文化の比較研究を目的とする調査で、かならずしも、日本移民者を主眼としたものではない。むしろ、量的にもおおく、文化的にもすぐれた内容をもつ、ドイツ系やイタリア系移住者の調査に、その大半の努力がそそがれた。しかし、こんどはちがう。こんどは日本移民70周年を記念しての日伯文化交流を正面にかけたシンポジウムである。そこでは、いやおうなしに、ブラジルにおける日系人の問題がとりあげられる。いつでもとりあげられるからと、いままで、意識的にさけてきた日本人移住者の問題が、真正面にすえられているのである。

6日間にわたる討論とさまざまな私的交流を通じて、わたしのうけた印象は、いささか唐突にきこえるかもしれないが、一口に言って、文化というものはいかに**はかないものであるか**ということであった。

文化というものが**はかないもの**、などと、わたしはそれまで、ついぞかんがえたことがない。文化というものは、ひとつの民族や社会に固有に存在しているもので、民族や社会の存在があるかぎり、ものの影のようにおのずからそなわり、自然ににじみだしてくるもの、というふうに、ばくぜんと考えていた。しかし、こんど、ブラジルにおける日系人社会を観察してみても、わたしの「文化自然兼帯説」は、すっかりゆらいでしまった。文化は、ひとつの民族や社

会に自然にかねそなわっているものではなく、意識的につくりだされ、かつ、たえず保守されなければならないものなのである。それは、自然にはえる庭の雑草のごときものではなく、人間がたえず手入れする植木鉢の花のようなものだ。種をまき、水をやらねば、花はひらかないのである。4、5日水をやらねば、それは枯死さえしかねない。文化は、鉢植えの花が**はかない運命**であるように、**はかない生命**をもったもの、というような感懐を、こんどの旅でわたしはいただいたのである。

明治42年に笠戸丸にのってやってきた移民がこの地をふんでから、ことしでちょうど70年になる。戦後の移民もふくめて、その間、25万人の日本人が、はるばる太平洋をわたった。そしてその子孫をふくめていまや75万人の日系人がこのブラジルに存在しているのである。

75万人というと、だいたい、鳥取県や沖縄県の人口に匹敵する。つまり、ブラジルの地には、日本の1県なみの人口があるのだ。

だが、まちがえてはならない。これらのひとびとは、もはや日本人ではない。日本国籍をもっているひと、すなわち法的に日本人とよべるひとは10~20万人ぐらいで、のこりの大半のひとびとはブラジル国籍の所有者つまりブラジル人なのである。

ブラジル政府が、属人主義でなく属地主義をとっている以上、ブラジルのうまれたひとびとは、すべて自動的にブラジルに国籍に編入せられるから、これは、とうぜんのけっかといえる。つまり、血は日本人であっても、ブラジルのうまれた以上、ブラジル人などである。

だが、それはたんに、法律上の形式的な問題だけではない。これらの日系ブラジル人たちは、血は日本人かもしれないが、その心は、もはや日本人とはいえず、むしろブラジル人とい

* 上田 篤 (Atsushi UEDA), 大阪大学, 工学部, 環境工学, 第一講座, 教授, 工学博士, 地域計画学及び都市デザイン

ったほうがいいのである。

よくいわれるように、これら二世、三世の日系ブラジル人たちは、だいいち、日本語をほとんど解しない。日本語ができるのは、なかでも特殊な環境にそだったひとたちで、それもせいぜい片言でいどの域をでない。たまに日本語のできるひとがいれば、それは特別な日本語教育をうけてきたひとたちにかぎられる。

ことばにおいてすでに日本ばなれしている以上、その他の日本文化ばなれは、さらにいちぢるしいものがある。この日系二、三世あるいは四世たちの大半は、すでにミソシルもツケモノもしらなければ、キモノやタタミの生活もしらない。そういう日本の生活文化とは、ぜんぜん縁のないところでできているのである。

さらに、これら日系ブラジル人たちのしぐさや行動様式といったものも、あきらかに日本人のそれとはことなる。かれらは、だいいちオジギというものをしらない。さらに腰をかがめるとか、伏目がちななどというしぐさももたない。ウチマタやコマタという動作、敬語や謙遜などといった日本的行動様式も、もはやかれらの徳目にはない。

ガルボン・ブエノという、サンパウロ随一の東洋人街である。ここに一步足をふみいれると、町のきたなさといい、看板の漢字といい、まさに日本そのものという印象をうける。そこをあるいているわかい男女もすべて“日本人”なのだ。しかし、それら“日本人”に日本語ではなしかけてみるとわかるが、かれらはまったく、異邦人なのである。

こういうふうに、その出身や、出身の文化をはなれて、現地人化、土着化したひとたちのことを、ここブラジルでは、カボクロとよぶ。アマゾンの奥には、何十年もまえに、コーヒー農場をにげだして、アマゾンのインディオの女と結婚し、土着化したカボクロ日本人がおおぜいいる。その悲惨なありさまをしっている日系一世たちは、自分たちの子孫が、カボクロ化することを極度におそれている。しかし、一世たちが危惧し、それをおしとどめようとすればするほど二、三世たちの“カボクロ”化は、かえって急速に進行するかにみえる。いまや、二、三世

たちの日本ばなれは、決定的なのである。

こういった現象、つまり移住者たちのカボクロ化は、他の民族のばあいはどうだろうか。がんらいがポルトガルの地であったブラジルに、もっとも多数植民したのはイタリア人である。そしてかれらは、ポルトガルをイタリア化してしまった、といえる。たとえば、ブラジル語をみても、それはポルトガル語であるにはちがいないが、もとのポルトガル語からみれば、その発音は鼻音にかかる部分がおおく、母音が開放的で、オクターブが数度たかくなっている。あきらかにイタリア化のひとつの過程をたどっている。ブラジル語は、ポルトガル語というより、伯伊混血、すなわち、“ポルトリアーノ”なのである。

これにたいして、アングロ・サクソン系であるドイツ人、オランダ人たちは、かたくなに、自国の文化をまもっている、といった面がつよい。たとえば、ブルメナウというドイツ人移住者のおおい町では、ドイツ風の屋根の傾斜のきついティンバー・ハウスをたてると、税金がやすくなる。つまり氷雪地方に発達したドイツ風文化をこの温暖の地においてさえ、積極的に賞揚しているのである。これはみかたによっては、そうとうの民族主義といえる。

ドイツ人や、あるいはオランダ人のように積極的に自己主張しないまでも、自国の文化をかたくなにまもっている民族は、数おおい。シリア人、レバノン人、ユダヤ人、それに中国人などがそうである。そのなかで、とくに問題になるのが、ユダヤ人と中国人である。かれらは、どの国にうつりすんでも、その国に同化せず、自国の文化をまもって特殊社会をつくる。それが「ユダヤ人」問題や、「華僑問題」をつくる因となる。その問題はさておき、ユダヤ人や中国人が、このように自分の国や民族の文化をまもる努力は、涙ぐましいものがある。ユダヤ人は、自分たちのなかまどうしで、おたがいにユダヤ教徒以外と結婚することをかたく禁じている。これはおそるべき排他主義といわねばならない。また、中国人は、どんな逆境にあっても、こどもたちに中国語ではなさせることをわすれない。中国語と中国文字とは、かれらの文

化の象徴なのである。こうして、世界中、ユダヤ人と中国人のいるところには、かならず、ゲットーとチャイナ・タウンとができるのである。

以上のようにみえてくると、ひとつの国や民族の、生活様式や文化をまもる、ということは、なみたいていのことではない。ドイツ人やイタリア人のばあいには、本国政府が移民者にたいし、移住後もいつまでも援助の手をさしのべている。オランダ人のばあいでも、住宅建設資金から大工まで、本国から派遣して家をたて、さらに、現地で営農に失敗して、帰国を希望するひとには、いつでも、本国までの帰国旅費と、かえってからの再起資金とが約束されている。いかえると、かれらは自国の文化をせおって、あたらしい土地におもむいたかがやける開拓者なのであり、傷つきたおれたら、いつでも本国がひきとることになっているのである。

これにひきかえ、日本の移民政策は、完全に“棄民”であった。本国の口べらし、人べらし以外のなにものでもない。移民者は、日本政府から涙金ほどの金をもらって現地にわたるが、それも船会社などの移民請負企業等によって身ぐるみはがされてゆく。現地へついたときには、ほとんど赤はだか同然なのである。これでは、移住地において日本文化を維持せよといったところで、それはどだいいうほうが無理な話であろう。

つまり、イタリア、ドイツ、オランダなどでは、移住者とその文化というひとつの“鉢植え”にたいして、本国がいまなお、援助の水をたえずそそぎ、その純粋繁茂を促進し、美しい花をさかせているのにたいし、ユダヤ人や中国人のばあいには、本国がらの援助がないかわりに、かれら自身がサボテンの鉢植えのごとくに、みずからひとつの“地域社会”をつくって、内部結束をかためているのである。つまり、水が外部からあたえられなければ、内部にこれをたくわえ、それをおかそうとするものには、針をといで、かまえているのである。健気な、とでもいうほかない。

ひるがえって、わが日本人のばあいは、本国がその水の供給もなく、かといって、サボテンのごとき凝集力もなく、これらの種は、風のまにまにちりぢりになって、現地の花と化してしまっているのである。それをカボクロ土人といわれようと、本国の日本人には、それを非難する権利はない。

シンポジウムには、数百人の日系ブラジル人が参加した。しかしそのほとんど99パーセントまでが一世であって、二世は、十数人のパネラーのほかには、皆無にちかかった。三世にいたっては、もちろんゼロである。75万人の日系ブラジル人とこのこれからのつきあいは、この現実から出発しなければならぬことが、いまさらのように痛切に感じられた。

現代ブラジルにおける日本への信頼はあつた。しかし、そのほとんどは、日本から棄民されたこれら一〜二世たち、なかんずく現地に同化した二世たちのここ十数年の努力によるところがおおきい。かれらの正直さ、真面目さ、勤勉さ、計画達成へむけてのたゆまざる努力といったものが、今日の日系二世のゆるぎない地位と信頼とを約束しているのである。かれらは、日本人ではなく、かといって、ヨーロッパ人でもない。日本人の種が西欧の土壤に花さいた東西両文明の第三のステロタイプとでもいうべきものを形成しつつあるかにみえる。日本の棄民化政策のうんだ、はからざるひとつの発芽形態かもしれない。

“日本人は、水と安全をタダとおもっている”と喝破したのは、イザヤ・ベンダサンであった。この伝でいけば、日本人は文化をもタダとおもっているのかもしれない。戦後の日本の各分野における文化的荒廃は、この文化のタダ意識にもとづくところがおおきいのもかもしれない。

みじかいブラジルの旅の期間中、以上のような疑問が、たえず、わたしの脳裏を去来した。おかげで、わたしは日本へかえってから、ほんとうにくたびれてしまった。(1978. 8. 5)